



総合図書館の歴史と現在

総合図書館は、全学の研究者・学生にサービスをおこなうとともに、附属図書館の事務・業務を支える上で中心的役割を果たしています。蔵書数は約120万冊。その内容は、内外の貴重なコレクションを含み、多くの研究者の注目を集めています。明治10年(1877年)の東京大学の開学以来130年の歴史を有しており、幾多の変遷を経て現在に至っています。

その今日までの歴史は大正12年(1923年)の関東大震災を境にして、大きく分けて整理することができます。ここでは「震災以前」と「震災以後」、さらに「震災以後」は、震災直後から昭和初期までの「図書館再建」の時期、戦時中から昭和40年(1965年)頃までの時期を「戦中・戦後の総合図書館」とし、最後に最近の様子を「現在の総合図書館」として簡単に解説しました。

□震災以前

明治10年(1877年)の東京大学の創設時に東京大学図書館は設置されました。東京大学の前身の東京開成学校、医学校や旧幕時代の各学校時代にも図書館に類する部署があったことがわかっており、その淵源はなお古くさかのぼるという説もあります。

いずれにせよ、旧幕時代の学校以来受け継がれてきた所蔵図書を中心に図書館はスタートしました。しかし、このときはまだ図書館という組織はあるものの、図書館として独立した建物はなく、図書室が法・理・文の三学部と医学部に散在している状態でした。

独立した図書館が完成するのが、図書館設置から15年後の明治25年(1892年)です。図書館の設計は文部省建築課、施工は請負人清水満之助(現清水建設)でした。煉瓦造りで、白い石材による尖頭アーチが、入り口、窓に配された中期ゴシック様式に基づく木造葺瓦葺の建物でした。こうした特徴は、法文科大学などのこの時期の学内の建築物に共通しています。

当時の図書館は、研究に資するための内外の資料を収集し、保存することに多くの労力が割かれていました。明治10年(1877年)には、約5万冊(うち洋書が3万冊あまり)の所蔵図書冊数が、震災直前には、76万冊にも及ぶに至っています。当時の些少な図書の出版状況からしても、図書館がいかに多くの図書を受贈あるいは購入していたかがわかります。

著しく増加する図書の保存スペース狭隘化に対処するため、明治40年(1907年)には書庫の増設がおこなわれました。

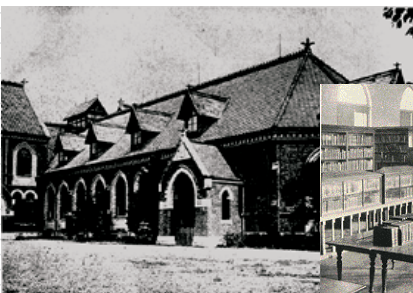
ちなみに、明治期には大学の制度の変遷とともに名称もたびたび変更されました。東京大学図書館(明治10年(1877年))から帝国大学図書館(明治19年(1886年))、さらに東京帝国大学附属図書館(明治30年(1897年))へと改称されています。図書館長制がスタート(明治30年(1897年)に和田万吉館長が就任)し、図書館商議会(重要事項の審議機関で、現在は図書行政商議会となっている)が置かれたのもこの時期です。



神田にあった
旧東京大学法理文三学部



明治中頃の医科大学



旧図書館外観



旧図書館内景



明治40年頃の図書館、左は法文科校舎



図書館閲覧室



書庫外観

□図書館再建（震災直後から昭和初期）

大正12年(1923年)9月1日の関東大震災によって、東京大学も甚大な被害を被りました。中でも、深刻だったのは図書館の全焼でした。旧幕時代から受け継ぎ、築きあげられた所蔵図書が、瞬時に灰燼に帰してしまいました。その中には、マックス・ミュラー文庫や「古今図書集成」など和漢洋の貴重な図書が数多く含まれていました。わずかに、焼失をまぬがれた図書（「焼け残り本」）を残すのみとなりました。

東京大学は、震災後直ちに、図書復興委員会を組織し、図書の復興運動を開始します。幸いにも、国内から「南葵文庫」や「青州文庫」（一部）をはじめとして、多数の貴重な図書の寄贈の申し出がありました。さらに、震災直後より各国大使館から援助の申し出が多く寄せられました。国際連盟においても図書復興援助の決議が採択され、海外30数カ国から数多くの図書の寄贈を受けました。また、東京大学自身も多額の予算を費やし、内外の貴重な資料を購入しました。その甲斐あって、所蔵図書冊数は昭和2年(1927年)に55万冊にまで回復しています。

焼失した図書館についても、図書復興と平行して進められていきます。大正13年(1924年)に図書館再建と図書の復興のためにとロックフェラー財団より400万円の寄付の申し出が寄せられました。東京大学は、即座にこの申し出を受諾し、これを財源にして新図書館を建設することを決定しました。直ちに古在由直総長を委員長とする図書館建築委員会が組織され、姉崎正治館長を欧米に派遣し、設計・設備について調査をおこないました。また、キャンパス構想全体も手がけていた内田祥三氏（当時営繕課長兼図書館建築部長で後に工学部教授、さらに東大総長となる）の設計監督の下で、具体的な新図書館の建設計画が進められました。大正14年(1925年)末には、早くも設計が決定しています。

翌大正15年(1926年)には工事に着手。完成は昭和3年(1928年)で、同年12月1日に竣工式を迎えています（以後12月1日は開館記念日となっている）。震災の教訓を生かし、鉄骨鉄筋コンクリート造りで頑強な構造を備え、地下一階、地上三階、中央部のみ五階であり、内側には7層の書庫が設けられました。外壁には淡褐色のスクラッチ・タイルを貼り、ゴシック風の細部とアーチをもつ入口を用いた外観のデザインは、キャンパスの他の建築物と均しく調和がはかられました。



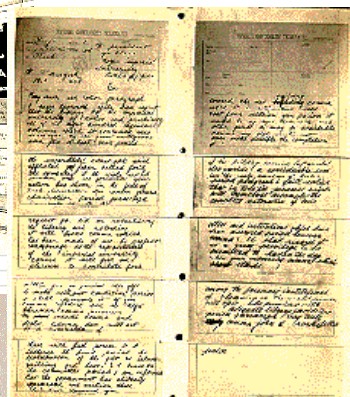
炎上する図書館



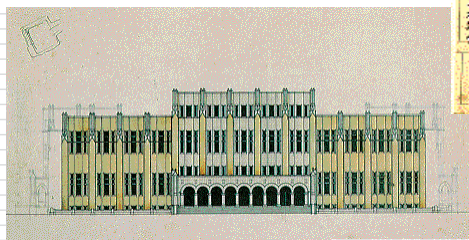
廃墟となった図書館



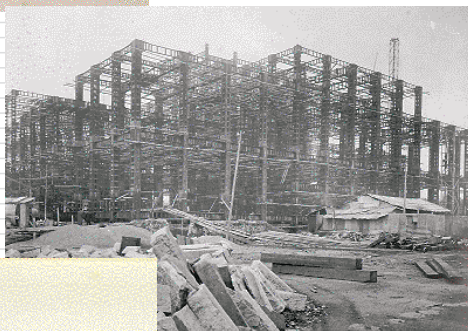
船出を待つオランダからの寄贈図書



ロックフェラー氏からの
寄付申し出の電報



内田祥三氏自筆の
計画案スケッチ



図書館工事風景



完成直後の新図書館

□戦中・戦後の総合図書館

震災から劇的な復興を遂げた総合図書館（当時は「本館」と呼ばれていました。「総合図書館」の名称は後に付けられたものです。）でしたが、今度は、戦争の被害によって、壊滅的な被害を受ける可能性がでてきました。昭和19年(1944年)、空襲が避けられない情勢となり、図書館の貴重な資料を守るために、総合図書館は貴重書疎開を計画しました。山梨県市川大門の元青洲文庫があった建物が空き家になっており、そこを疎開先に決定し、当時の市川三喜館長の陣頭指揮の下で、職員総出で作業をおこないました。このときの疎開図書は、インキュナビュラをはじめ、木内文庫のカント著作及び関係古版本、キリシタン関係貴重書、16～18世紀の貴重書など約2千冊でした。これをタバコの空き箱3百個に詰めて、秋葉原駅から現地に送ったそうです。日ごとに物不足、交通事情の悪化が深刻となっていた頃で、たいへんな作業であったと伝えられています。



旧青洲文庫跡

震災で大打撃を受けた図書館でしたが、太平洋戦争で東京一帯が焼け野原となる中で、幸運にも、空襲の被害を全く受けずに済みました。本郷界隈はほとんどが火災で焼失したものの、図書館建物に延焼することはありませんでした。一説には、東京大学周辺に植えられた樹木が防火林の働きを果たしたといわれています。しかしながら、直接の被害は受けなかったものの、予算・物資の窮乏や人手不足のため、総合図書館の図書館業務は著しい停滞を余儀なくされ、利用も激減しました。

昭和30年代になり、経済や産業の成長と高度化に伴い、東京大学を取り巻く環境は大きく変化していきます。総合図書館も建設されてから三十年余りがたち、建設当時の施設や機能のままでは、近代的な大学図書館としての機能を十分に果たすことができなくなっており、大学の最前線の研究教育に資するためには、飛躍的な改革が急務となっていました。

そこで、総合図書館をはじめとして東京大学内の図書館全体の近代化を推進するため、昭和35年(1960年)に就任した岸本英夫館長を中心にして、さまざまな改善計画が立案、実施されていきます。



岸本館長とメトカーフ博士
(ハーバード大学名誉図書館長)

まず、全学の図書を効果的に利用できる方策として、学内図書館間の協力を強化することを目的とする東京大学の図書館全体の抜本的な機構改革が施されました。「本館」から「総合図書館」への改称もこの時おこなわれ、総合図書館だけを附属図書館と位置づけていたのを改め、東京大学の全図書館（室）を総称して附属図書館とすることとなりました。

学内図書の効果的な利用の一貫として、全学の図書の総合目録（カード目録）が作成されました。それまでは、東京大学全体にわたって図書を探す方法はなく、利用者は各図書館（室）をたずねなければならなかったため大変不便でしたが、総合目録によって大きく改善されました。総合目録は、現在も参考室に置かれ利用されています。



総合目録作成作業風景

また、総合図書館の機能向上のため、諸施設の全面的な改修がおこなわれました。現在の総合図書館内のプランニングは、このときのものです。

こうした諸改革の実施には岸本館長の尽力に負うところが大きく、以後長期間にわたって、改革の果実を享受することができました。



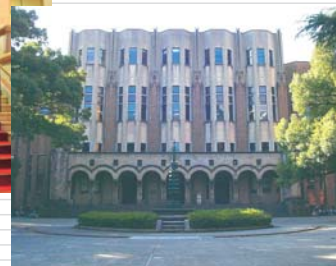
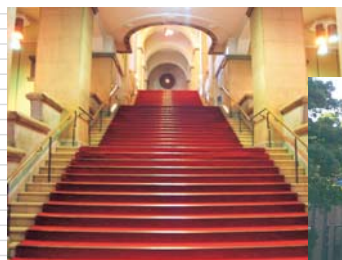
改修作業風景（3階）



改修後の総合図書館（1階）

□現在

幾多の歳月を経て、連綿と受継がれてきた総合図書館の所蔵図書数は、現在では約120万冊にまで至っています。この質量において豊富な内容の資料を利用者に活用してもらうこと、次代に残し保存していくことは、総合図書館の大きな役割といえるでしょう。



情報化の進展を反映して、オンラインやCD-ROMなどを使って、図書や雑誌が電子的に出版されるようになりました。そうした新しい媒体に対応するため、ネットワークを介した学内への情報提供サービスもおこなっています。

学外に向けては、インターネット上にホームページを公開し、図書館からさまざまな情報を発信しています。このように、資料の保存と利用から情報の蓄積と発信へと図書館の機能を拡張しているところです。

また、展示会を開催するなど、総合図書館の豊かなコンテンツを一般に公開しています。



東京大学総合図書館ホームページ
<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/sogoto/>

大きな変化の時代にあって、最先端の機能を有する大学図書館へと生まれ変わるため、総合図書館はさまざまな試みをおこない、機能・サービスの向上に努めています。

東京大学附属図書館年表

1877 (明10)	4月	東京大学創設 (医・法・文学部)	1993 (平5)	3月	CD-ROMデータベース (医学部・Medline) ネットワークサービス開始
	10月	法・理・文三学部 (一ツ橋) 図書館の設置、図書館規則の制定	1994 (平6)	3月	図書行政協議会、「東京大学附属図書館の将来像—今後の対策について—」を報告
1881 (明14)	6月	東京大学職制の改正、同時に四学部図書館規則を「東京大学図書館規則」として統合		3月	附属図書館、「東京大学附属図書館—ひろがりをつなぐ—」を報告
1886 (明19)	3月	「帝国大学令」公布、「東京大学図書館」を「帝国大学図書館」と改称		7月	大型計算機センターでのOPAC検索サービス開始 (24時間サービス)
1892 (明25)	8月	図書館新築落成	1995 (平7)	9月	週及入力10年計画開始 (第Ⅱ期)
1897 (明30)	6月	「帝国大学図書館」を「東京帝国大学附属図書館」と改称、「館長」職制制定		10月	wwwサーバによる図書館ホームページの開設
1899 (明32)	2月	「図書館商議会」設置、同規格制定	1996 (平8)	11月	CD-ROMサーバによるCurrent Contentsサービス開始
1918 (大7)	9月	「東京帝国大学附属図書館規則」改正。本館管理の下、部局、各教室・学科研究室にも図書を備え付け		11月	東京大学学位論文論題データベースサービス開始
1923 (大12)	9月	関東大震災、附属図書館炎上全壊、蔵書喪失、国際連盟で復興援助の決議	1997 (平9)	1月	附属図書館電子化事業開始 (霞亭文庫の電子化)
1924 (大13)	6月	帝国大学附属図書館協議会創設		6月	本郷・駒場キャンパス図書館 (室) 間相互貸借のための集配サービス開始 (16部局42図書館 (室) 参加)
	12月	ロックフェラー財団より図書館再建資金400万円受贈	1998 (平10)	7月	図書行政協議会、「附属図書館改善計画—よりよい利用者サービスの実現をめざして—」を報告
1928 (昭3)	12月	新図書館完成。(12月1日を開館記念日とする)	1999 (平11)	4月	大型計算機センター、教育用計算機センター、附属図書館の一部を統合し、情報基盤センター発足
1950 (昭25)	3月	「図書館商議会」を「図書行政協議会」と改称		10月	Webブラウザに対応したOPACシステム (Web OPAC) の公開
1961 (昭36)	4月	図書館に部課制実施	2000 (平12)	4月	電子ジャーナル試行実験開始
	5月	岸本館長「附属図書館改善計画案」発表		10月	総合図書館開架図書の種類変更開始 (2002年8月完了)
	9月	ロックフェラー財団より図書館機能近代化資金8,400万円受贈、改装工事開始 (1964年3月完了)	2001 (平13)	3月	新図書館電子化システム (図書館業務システム) 運用開始
	11月	全学総合目録の編成作業開始		10月	Webリクエストサービスを開始
1962 (昭37)	10月	図書館報「図書館の窓」創刊	2002 (平14)	2月	多言語対応版OPACのサービス開始
1963 (昭38)	9月	「東京大学附属図書館基本規則」制定、「本館」を「総合図書館」と改称、附属図書館は、総合図書館と部局図書館からなることを規定		10月	駒場図書館の開館
1965 (昭40)	7月	総合図書館、国連の寄託図書館となる	2004 (平16)	3月	「東京大学附属図書館基本規則」の新たな制定。附属図書館は、総合図書館・駒場図書館・柏図書館・部局図書館からなることを規定し、運営原則を「共働する一つのシステム」とすることを明記
1968 (昭43)	11月	東大紛争のため総合図書館閉鎖 (翌年2月まで)		4月	国立大学法人化「国立大学法人東京大学」となる
1969 (昭44)	3月	外国雑誌一括購入業務の開始		5月	全学資料購入集中処理システム暫定スタート (12月より本格運用)
1982 (昭57)	1月	裏田館長「東京大学総合図書館改善計画試案」発表 (改修工事1984年3月～1987年4月)	2005 (平17)	2月	柏図書館正式開館 (2004年5月より部分開館)
1985 (昭60)	4月	附属図書館電算化プロジェクト発足		3月	e-DDSサービスの開始、ASKサービスの試行開始
1986 (昭61)	5月	附属図書館電算化システム稼働開始		4月	キャンパス間返却サービスの開始
	6月	OPAC (利用者用オンライン目録) サービス開始	2006 (平18)	3月	東京大学図書館憲章の制定・附属図書館プランの策定
1987 (昭62)	4月	総合目録 (洋書) 週及入力開始 (～1990年3月:第1期)		3月	鶴外書入本画像データベースの公開
	4月	バックナンバーセンター設置		4月	東京大学学術機関リポジトリ (UTリポジトリ) の公開
1988 (昭63)	4月	共同利用図書購入費の学内措置開始		9月	MyLibraryサービスの開始
1992 (平4)	4月	学術情報センターのNACSIS-ILLシステムに参加	2007 (平19)	4月	学術雑誌等購読・購入費の全学共通経費化
1993 (平5)	1月	UTnet (学内LAN) によるOPACサービス開始 (インターネットへのOPAC公開)			

(2007年3月)